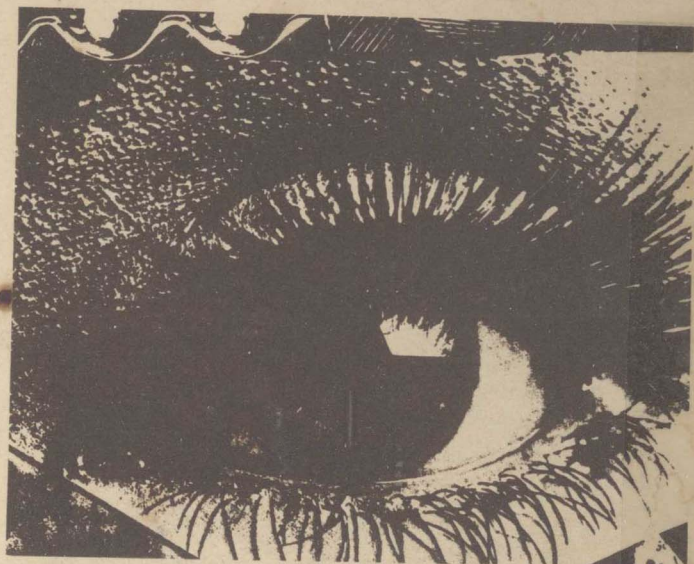
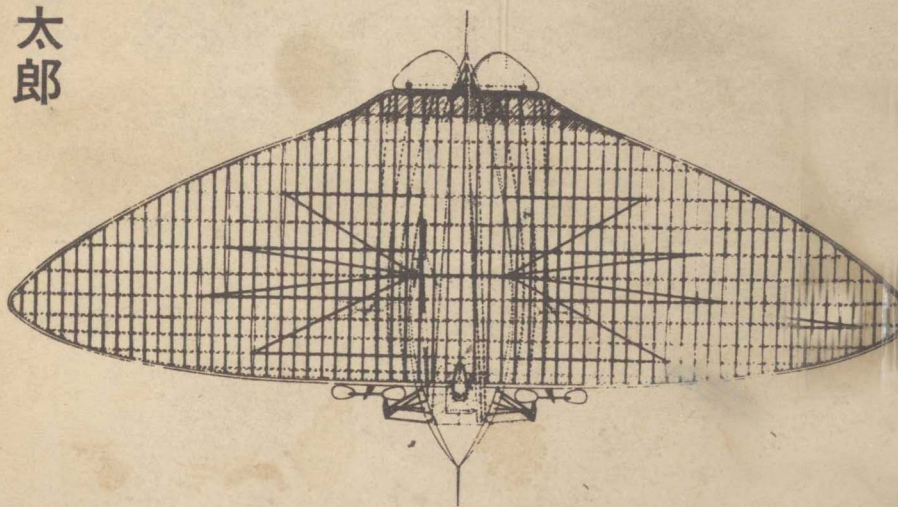


君に情熱を教えよう

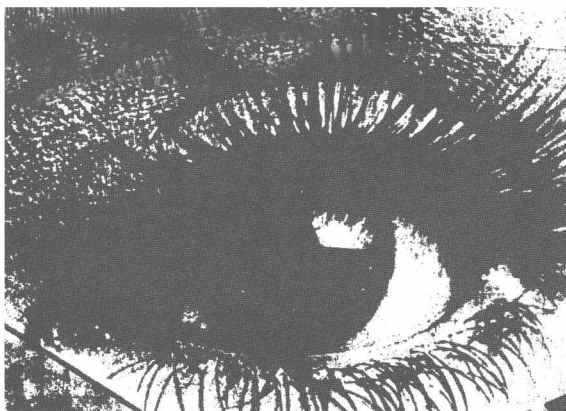


石原慎太郎



君に情熱を教えよう

石原慎太郎



いなあとろっぷ社

読者のみなさまへ

この本をお読みになって、どのような感想をお持ちになりましたか。あなたの読後感を、ぜひお寄せください。また、あなたのお読みになりたい本をお知らせください。インナーブックスの企画の参考にさせていただきます。

なお、どの本にも、一字でも誤字や脱字がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢なども合わせてお書きそえていただければ、幸いに存じます。

株式会社 いんなあととりつぶ社
インナーブックス 編集部

君に情熱を教えよう

昭和四十九年十月二十日印刷
昭和四十九年十一月一日初版発行

著者 石原慎太郎

発行者 大坪直行

発行者 株式会社 いんなあととりつぶ社

東京都港区麻布台一丁目九番三号 郵便番号一〇六

電話 (〇三)五八六一八二一 (代表)

郵便振替番号 東京一三五〇二四

印刷・製本 大日本印刷株式会社

© Shinkaro Ishihara, 1974
乱丁・落丁本はおとりかえいたしません。

0095-505018-0389

君に情熱を教えよう

ナタナエルよ、君に情熱を教えよう。

行為の善悪を判断せずに行なうしなければならぬ。善か悪か懸念せずに愛すること。

私の心中で待ち望んでいたものをことごとくこの世で表現した上で、満足して——或いは全く絶望しきって死にたいものだ。

——ジッド「地の糧」

伸晃と、弟たちへ

第一章 極なる山へ

出発	8
空港で	15
バンコック	17
パタヤの海	21
大使の家で	30
他人の戦争の中で	34
カルカッタ	49
ヒマラヤへ	53
ホテル・シャンカール	55

第二章

海へ

船を待つ	154
帰国	135
廃墟	122
ルクラの小休止	112
飛行	97
ラムサンゴ	89
ある邂逅	80
祭典	78
市場	76
目玉寺	70
聖地	62
カトマンズウのピクニック	58

あとがき

新しい出発

.....

270

酒宴

.....

246

蘇った朝に

.....

242

嵐

.....

209

岬

.....

195

季節の引幕

.....

190

夜半

.....

183

出航

.....

173

装幀／木村光佑

第一章

極なる山へ

出 発

君は僕とのこの旅をいつ終えてもいい。いつ僕と別れて、一人で歩み去ってくれてもいい。君一人で、僕という以上にもっと大胆に、もっと確信に満ちて歩んでいけるようになったなら、いつでも。

君とのいくつかの旅を織り込んでつづる僕の饒舌に君が倦いたなら。そしてその時、君が確信と勇気をもって迷うことの出来る人間になっていたら、君は一つの資格を得られた筈なのだから、この本を捨てて一人で出ていきたまえ。

そのためにこそ僕は君に話しかけ、この本を書いたのだ。

僕が君に教えたいのは、実は簡単なことなのだ。しかし、多くの人間がそれを容認出来ずにいる、ある単純なことだ。

悦楽は、悲痛と紙一重の裏表でしかない。

丁度、生と死がそうであるように。

或いは、孤独が、実は充ち充ちた存在の姿であるように。

そのことだけなのだ。

＊

旅は、本当は誰にも見送られずに出かけるものなのだ。少くとも、誰も見送ってはいないと思つて、家を出たまえ。

＊

僕たちはさり気なく家を出た。君と僕とが二人だけとする旅は初めてだったが、僕にはこの旅がきつと無理なく自然に運ばれていくに違いないという予感があった。君の母親は心配そうだったし、僕にも父親として、かすかだが、いいような不安のようなものがあつた。しかしそれは多分あくまで君が僕の子供だということのせいだったに違いない。いずれにしても、それは僕たち互いにとって初めてのことなのだから。

ただそれ以上に、僕には互いに男として、君がこの旅で僕のいい仲間であるだろうことに自信があつた。それは結局、君がその年頃にまでなつたということなのだ。ようやく伸びたその手脚だけではなしに、君はこの旅で僕に心の歩幅を合わせることが出来るようになった筈だ。

まだその資格のない弟たちは、半ば羨望と、半ば、怖いことをしようとしている人間を眺めるような眼つきで、僕らを見送っていた。その視線を君は感じただろう。だから一層、君は彼らにはさり気なく、母親にはつれないほどだった。

そんな君の気負いにも、僕は微笑出来た。

確かに、僕らがしようとしている旅は、他人が冒険と呼ぶものの一部だった。第一、今まで僕はそうした旅や試みに出かけていく時、肉親を伴うことはなかったし、孤^ひりでありたいと思った。勿論、そのための仲間はいたが、そこに、例えば君や、君の母親を連れていくなどということ进行いもしなかった。それは、君たちが幼かったせいもあるし、君の母親が女であるということだけでだ。

しかし、今度は君がいい出す前に僕が君を誘った。

そしてこの旅がつつがなく終れば、僕は君を、僕が未だに僕自身のために多くのものを獲ち得ている、あの海の上を小さな船でいく旅の仲間に加えてやれるだろう。

*

とにかく僕たちは出かけて来た。

母親や弟たちは口々にかしましく何かいていたが、君は、いつも僕がするようにそれを無視して背を向けた。

*

今度の旅は、僕たちの一人の仲間を、世界で最も高い山の頂き近い鞍部コウブに担ぎ上げ、彼がそこから未踏の大斜面をスキーとパラシュートで滑降するのを助ける仕事だった。僕は今度はそのごく基礎的な手伝いをするだけにとどまったが、それでもさまざまな危険のある旅ではあった。

第一、僕は君と初めて一緒に飛行機に乗る。

君は笑うだろうが、僕は自分が肉親と一緒に、未だその安全性が絶対に確保されたとはいえないこの乗り物に乗ることを怖れて来た。それぞれの人間が生きていくという無数に近い確率の中で、何もわざわざ同じ札と一緒に引く必要はない、という気持なのだ。それは、自分より小さいものの、小さいが故により大きい可能性への妄執ということかも知れないが。

しかし、君がこの旅に誘えるまでの年齢になった今、僕は不思議にそれを怖れない。

隣り合わせた飛行機の座席で、君がベルトをしめるのを確かめながら、離陸前の飛行機で誰しもが味わうあのかすかな感傷の中で、僕はふと遠い以前のある出来事を想い出していた。

君がまだ、一番末の弟よりもっと小さかった頃の夏、僕と君の母親は、ある高原の山小屋に、ある日ふもとの温泉に保養に来ていた僕の弟を訪ねたことがある。

その帰りの夜道、突然山に濃い霧が湧いた。

白い闇の中を、殆ど手さぐりで車を進めながら、断崖への路肩の幅を確かめるために窓を開け

る度、白く濃い混沌が手触りさえ感じさせるように車のキャビネットに流れ込んだ。その度僕は、不吉で邪悪な何かの意志の触手が小さい君の頬に触れないよう、霧を手で払い、君の母親に君をもっと覆って抱きしめさせたものだ。

車を駆りながら山の中で霧に出会った経験は何度もあったが、その時だけは、僕は無性に怖しかった。

改めて君に何を押し売りしようというのではない。それはただ、小さいものへの心づかいだったろう。君がもっと大きくなり、やがて君自身の子供を持った時、小さな共感で頷くことの出来ることがらだろう。

そしてこの旅も、君に対する僕からの心づかいともいえるだろう。押し売りではないよ。つまり、僕の義務なのだ。君に対する、というより僕自身への。

僕は、僕自身の方法で、僕を君に伝える必要がある。君がそれをどうとうろと、敬意を払おう。軽蔑しようと、或いは非難しようと。

何故なら、君は誰よりも僕に間近い人間なのだから。

*

そうだ、単純なことなのだ。ただそれを君に伝えたい。君にそれだけを知ってもらいたい。

そのためには、君自身の眼で見ることだ。僕が指したものを、君は、君自身の眼で見るのだ。

君の視力で、君の色感で、君の遠近法で見つめるのだ。

僕は君に、正方形を正方形として描く、アカデミックなデッサンなぞ教えようとは思わない。

＊

君には君の眼ざしがある。君が見る人間も、自然も、或いは神すらも、実は君の眼ざしの内にだけ、その形と色で在るのだ。

＊

すべての「存在」とはそうなのだ。

君の眼ざしが、すべてのものの存在をそこにそうして定着させる。

太陽も、海も、雲も、人間も、神も。

ある詩人は歌っている。

『僕らが見ていないとき

海は別の海になる』

＊

そうだ、それは別の海ではない。君のための、海ではない。

＊

これは逆説ではない。真理なのだ。

すべてがその真理から始まる。その真理の煉瓦で築き上げられる人間の人生、生涯という建てものの工学的な保証も、それぞれの人間自身が一人で引き受けなくてはならぬ。その建てものの中に住むのは、それぞれ一人なのだから。

僕は中学生の頃、絵を描くことが好きだった。熱中さえした。しかしその熱をさましたのは、ある愚かな美術教師だった。怖いことは、その男が、絵画という芸術を写真への誠意と錯覚していたことだ。彼は執拗なほど情熱的に、僕たちにそう教えた。

果実を盛られて壁際に置かれた平たい皿が、手前から壁に向って拡がっていることを、眼で見、以上に正確に写せ、と彼はいった。

眼で見る以上に正確に——とは。

なんと大それた、遠近法への盲信。

写真は所詮不正確だ、彼はいった。

ドガがいったとは全く逆の意味で。

*

皮肉なことに、その教師の美術学校の卒業記念大作の婦人像は、手にしたヴァイオリンやまとった衣裘は、確かに写真以上に立体的に描かれていたが、肝心の女の鼻がどう見ても曲っていた。彼の、描くということの妄執は、美しい顔立ちのその女性の美しさの核たる鼻筋にはなかつ